
偽物の従者

偽善者と書き道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽物の従者

【Nコード】

N7609U

【作者名】

偽善者と書き道化

【あらすじ】

アンチをアンチする妙な小説の主人公クリフをサーバントにした作品です。

主人公は士郎でおそらくヒロインは美綴……だと思う。

色々設定がいじられています、それでも良い方は駄文ですがどうぞ……。

運命の夜（前書き）

どうも偽道です。

何を思ったかFateの小説を書き始めました。

今回は、ちょっと急ぎ足で書いた感じがあり内容が薄い気がする…。

遠坂と士郎と言峰のサーヴァントが変わっています。

士郎の召喚もご都合主義があるのでツツコミは無しでお願いします。

では、ごうござ……

運命の夜

それは……不思議な夢だった。

何時も見erる夢と数分違うない大火災。

見渡す限り赤、紅、朱。

かつては人であったであろう物は黒い塊へと姿を変えている。

そんな中、1人の少年が歩いていた。

本来そこに居るべきである自分では無く、自分とは違う黒髪の少年。何処かの民族衣装を纏った少年はフラフラと歩み、力尽きて倒れる。

……見過ごせる筈などない

急いで少年に駆け寄り、抱き上げる。

まだ……生きている。

呼吸は弱々しくも必死に生きようと言う生命の力強さがある。

「生きていてくれて有り難う……」

涙が出た。

その少年が生きていてくれたのが嬉しくて、救われた様な錯覚を覚える。

少年は、そんな俺を不思議そうに見ていた。

そんな、そんな夢を見た……。

赤毛の少年は古いストーブを修理していた。

その手付きは何処か手馴れていて、故障しているであろう場所まで迷い無く分解していく。

「よし、こんなもんかな」

修理が終了したのだろう。

少年がストーブを点けると、しっかりと火が灯った。それと同時にガラリと音を立て扉が開かれた。

「衛宮、どうだ？」

「ああ、大丈夫だ。

ケーブルがちょっといかれてただけみたいだな」

少年……衛宮 士郎が立ち上がる。

「一成、もう時間もないし残りは後でもいいか？」

「そつだな……すまないが頼めるか衛宮」

「ああ、まかせろ」

そう言えば……と不意に士郎は今朝見た不思議な夢を思い出す。

「なあ、一成。

むかし経験した事を他人の視点で、しかも自分がいるべき場所に別の誰かが現れる夢を見た事あるか？」

「いや？その様な珍妙な夢は見た事がないが……」

「そうか……悪いな、変な質問して」

あまり、考えすぎない方がいいのかもしれない。
夢は夢なのだから……。

「げげ……女狐!？」

「……いきなり失礼な挨拶ですね…生徒会長」

士郎は一成の反応に半ば呆れつつ顔を上げる。

一成と遠坂は仲が悪い。

一度、一成と話していた時、遠坂の事がネタに上がった事があったが……。

『目を覚ませ衛宮！』

確かに遠坂は一見優等生だ。実際優等生なんだが…… 長い為いまいち覚えていない …… 故に油断しては…… 長い為省略 ……
…と云う訳だ。

聞いていたか衛宮?』

あれ以来、一成の前では遠坂の話はしない。

そもそも、士郎は遠坂の事を語れる程知っている訳でもないが……。

「ほら、一成あまり時間がないんだろ？」

「……そうだな、さらばだ女狐」

遠坂に背を向ける一成の背中を押しながら、ふと思いだしたかのように振り返る。

「おはよう、悪かったな遠坂」

「衛宮くんもね、巻き込んでごめんなさい」

士郎は遠坂が自分の名を知っている事に若干驚きはした物のあまり気にせず一成の後を追った。

放課後、学校の備品を修理し終えた士郎は額の汗を拭いながら時計を見る。

「もうこんな時間か……一成、悪いけど先に帰っていてくれないか」

「はあ……衛宮、俺が言うのも何だが……少し人が良すぎるのではないか？」

一成は士郎の少ない言葉だけで事を察した様に溜息をつく。

「確かにそうかもしれないけど……これも人助けだからな。困っている奴をほっとけない」

「……ああ、そうだったな。」

手助けしたいのだから……門限が厳しい……すまない」

「気にするな一成、これは俺が引き受けた事だしな」

士郎は一成と別れた後、真っ直ぐ弓道場へと向かう。

「あれ、衛宮？」

なんだ、弓道部に戻ってくる気になったんだ」

「いや、悪いけどそのつもりは無いよ美綴」

士郎は美綴と呼んだ少女に苦笑しながら言う。

「と言う事は……また、あいつのお守りか……」

「仕方ないだろ？」

慎二だっているいろいろ忙しいんだろしさ」

「冗談、あいつなら部活の女子とどっかに行ったよ」

呆れた様な表情を浮かべながら活発な笑顔を浮かべる。

「仕方ない。私も部長だし、一緒に片付けるとするか」

「いいのか？」

美綴にだってやりたい事くらいあるだろ？」

「いいんだよ。このまま知らないフリをする方が気持ち悪いしね……」

ここまで言われれば士郎が折れざるえない。

士郎は、美綴の性格をそれなりに知っているつもりだ。

「分かったよ……でも、女の子1人の夜道は物騒だから家まで送って行くからな」

「なんだ、衛宮は私のナイトにでもなっってくれるのかい？
だったら頼もつかな」

「はいはい、ご期待に添える様にお姫様」

「流石ブラウニー。随分と綺麗になったね」

「美綴……ブラウニーってやめてくれ」

日が完全に沈んだ頃、漸く片付けを終えた2人は帰路に着こうとしていた。

「悪いな美綴。随分遅くなった」

「こっちこそ悪かったよ。」

うちの部活の事を衛宮にやらせてしまった」

「いや、大変な時期に部を抜けたんだ。出来る事があれば言ってくれよ」

そう、たわいも無い会話をしていると突然鉄のぶつかり合う高い音が響く。

「美綴、早く家に帰るんだ！」

「衛宮！？」

士郎は音の鳴る場所へと駆ける。

思い出すのは一成が言っていた殺人事件。

誰かが狙われているかもしれないと考えれば、衛宮 士郎のやる事など1つだけ。

赤いコートを羽織った少女は厳しい表情をしながら学校の屋上に立っていた。

「マスター、どうやら奴さんが来たみたいだぜ」

「凄い殺気……」

何時の間にか現れた青い男は楽しそうな笑みを浮かべる。
少女が青い男の視線を追うと、上から下まで真っ黒な服を着た現代風の男が立っていた。

「まずは1つ聞きたいのだけど……これを張ったのはお前たちか？」

黒い男は手に持つナイフを結界の起点に向ける。

「そんな訳ないでしょう？」

魂喰いなんて外道のやることよー!!」

「……まあ、何方にしても俺達のやる事なんて1つだけだな」

黒い男は一瞬で姿を消す。

先程まであった殺気すら消し去り辺りは静寂に支配された。

「ランサー……分かる？」

「いんや……対した隠行だな…アサシン!!」

ランサーと呼ばれた男の槍が少女の背後に現れたアサシンを貫かんと迫る。

アサシンは少し驚いた表情をしながらも槍を器用に避け、距離を取る。

「E S i s t g r o ,

E s i s t k l e i n……ランサー、着地は任せたっ!!」

少女は壁の多い屋上は不利だと判断したのか屋上から飛び降りる。

アサシンはそれを追いかける様に追撃するが、やはりその一撃はランサーの槍に阻まれた。

「てめえ……何処の英雄だ？」

たかがナイフで鎧を切り裂く暗殺者など聞いた事もない!!」

ランサーの言葉に驚き少女は彼を見上げる。
確かにランサーの言うように肩当てが綺麗に切られている。

「知ってどうする？」

知った所で俺達のやる事など……誰だ!？」

アサシンは何か気付いたかのように後ろを振り返る。

そこには1人の男子生徒が立っていた。

男子生徒は気付かれた事に驚きながらも逃げ出す。

「はあ……こんな事したくないけど……マスターの命令だ」

アサシンは溜息をしながら走る。

口封じの為に……。

士郎はただ走っていた。

逃げなくては殺される……。

ただ、これだけが今解る唯一の事実。

だから……士郎は彼女の事を忘れていた。

「衛宮!どうしたんだ……そんなに急いで。やっぱり何かあったの

かい？」

「なっ…美綴！？」

士郎は後ろを振り返る。

あの男はまだ追って来ていない。

「美綴、早く逃げるんだ！」

「なんかあつたみたいだね…警察に…」

「駄目だ！！！」

美綴は士郎の声に驚いた表情をした。

士郎は黒い男と青い男の戦いを思い出す。

とてもじゃないが、警察が来た所でアレに勝てるとは思えない。
逆に殺されるのが目に見える。

「参ったな…殺す人間が増えてしまった」

士郎は心の中で悪態をつく。

アレには絶対に勝てない。

どうやってもアレに勝つ事など出来やしない。

絶対的な死の気配が士郎に纏わり付く。

「恨むなら恨んでくれて構わない」

男は一瞬で美綴の目の前に現れる。

このままでは、美綴は確実に殺される。

ふざけるな。

何故、美綴が殺されなければならない？

こんな訳の分からない事で何故、自分も美綴も殺されなければならない？

士郎は美綴を押し、身代わりになる。

「ぐう……」

「ちっ……」

アサシンはナイフを引き抜き、何かに狙いを定める様に構える。

「せめて、痛みを感じない様に……逝かせてやる」

無感情な蒼い瞳が月夜に輝く。

（死ねない……）

士郎は視線を美綴の方に向ける。

（まだ、死ねない！

ここで俺が死ねば次は美綴だ……

冗談じゃない、俺は……まだ誰も救えちやいない！！）

だから、これは本来あり得ない事。

「マスターだと！？」

まさか、魔方陣もなしで召喚を！？」

赤い輝きが士郎を美綴を男を包む。

そして……

「はあああっ！」

「くっ!？」

赤い外装の男が士郎と美綴を守る様に立っていた。

「サーヴァント、フェイク「偽物」。

召喚に従い参上した」

フェイクと名乗った男は機械的な双剣を手に士郎に視線を向けぬまま問い掛ける。

「問おう。キミが私のマスターか？」

運命の夜（後書き）

終わった……。

結構一成が出まくったな……と読み返すと思う。

最後に出てきたフェイクはエミヤではありません。

アンチをアンチする妙な小説に書いた二次設定の無銘です。

では、また次回。

運命の夜？（前書き）

こんばんは偽道です。

今回も書きませんが読みたく無い人は読まないでください。

この作品ではサーヴァントとマスターのコンビが変わっていたり、サーヴァント自体が違っていたりします。

原作のメンバーが好きな方は読まない事をオススメします。

それでも良い方のみどうぞ…。

運命の夜？

士郎は目の前の光景に理解出来ずにいた。

目の前で2人の人間とは違う何かが戦っている。

1人は先程まで自分を殺そうとしてきた黒い男。

もう1人は機械的な双剣で黒い男のナイフを受け流すフェイクと名乗った男。

「フェイクなんて巫山戯たクラス……聞いた事もない。

それに……俺はあんたが気に食わない！」

「奇遇だな……私もだよ。

貴様の目、貴様の生き方、貴様の在り方が気に入らん……殺人貴」

「……俺の正体を知ってるか！」

フェイクは黒い男に斬られた双剣の片割れを見て舌打ちをする。

「偽物である私に使えるか分からないが……」

赤い男は機械的な剣を放り投げると何時の間にかその手には白い短刀が握られていた。

男は安堵した表情をしながら剣を構え直す。

「……武器を複数持っているのか？厄介だな……」

「キミの目に比べれば可愛いものだろ……」

再び、2人の男が打ち合う。
剣戟が響く。

その戦いは正に異様。

士郎が解析した限り膨大な魔力の籠る剣をただのナイフで次々と斬り捨てる黒い男。

一方、その膨大な魔力の籠る剣を使い捨てと言わんが如く次々と持ち出すフェイク。

この戦いを行う者は何方も異常で何方も異端。

しかし、そんな戦いは黒い男が距離を取った事で終える。

「……時間切れか。」

このままじゃランサーに追いつかれる……」

「逃げるか？」

「俺には叶えたい事があるから……あんなマスターの下でも勝ち残れるならそれでいい」

それだけ言うと、黒い男は闇夜に溶ける。

士郎は安堵しながら目の前の男を改めて見た。

白髪のアールバックに褐色の肌。

黒い部分鎧の上に羽織った赤い外装。

時代錯誤な格好だが、やはり見た目は人間にしか見えない。

「なあ、あんた何者なんだ？」

「なんで俺達を助けたんだ？」

「……キミが召喚したサーヴァントに決まっているだろう。」

そして、サーヴァントがマスターを守るのは当然の事だと思っがね」

フェイクは何を当たり前の事をと肩を竦める。

しかし、士郎と美綴はそれに納得がいかないと声を上げようとするが、フェイクにそれを阻まれる。

「質問は後だマスター。新手が来た様だな……」

「新手って……話し合う事は出来無いのか!？」

「正気かねマスター？」

相手はキミと同じく聖杯を望む者だぞ……話し合いなど無駄だ」

「だから、俺にはそのサーヴァントとかマスターとかが全く分からないんだ!」

「なに?」

フェイクは何やら難しい表情をしながら士郎と美綴を見据える。

「何方にしても話は後だ。」

まずは目の前の敵を片付け……」

「駄目だ!

訳も分からないまま、誰かを殺すなんて俺には容認出来無い!」

「私も衛宮と同じ考えだよ。」

さっきから黙って聞いてたけど、まずは説明するのが先じゃないか

い？」

フェイクは2人に対してどういふべきか困惑する。敵は最早近く迄来ている。説明する時間など無い。

しかし、士郎の性格を考えれば令呪を使って迄止められそうで怖い。

「随分と甘いマスターに引き当てられたものね……アーチャー」

「「遠坂!?!」」

士郎と美綴は驚いた表情を浮かべながら青い男を伴い現れた少女の名を呼び、フェイクは何時襲われても良い様に機械的な剣と白刃を構える。

「あらアーチャー!」

弓兵とは言え、騎士である貴方はマスターの命令に従えないのかしら?」

「……………」

フェイクは遠坂と青い男を見て、舌打ちをしながら白刃の剣を消し、機械的な剣をタロットカードみたいな物に変え懐に仕舞う。

「良いだろう。」

残念ながら、私程度の実力では今の戦況は厳しいからな」

フェイクが刃を納めた事に士郎はホッとする。

その、厳しい表情から納得が言っていないのは見て取れるが……取り敢えずは安心して良いだろう。

「さて……綾子に衛宮くん。
まず、貴方達が魔術師だったのは意外だったわ」

「遠坂も魔術師だったのか!？」

いや、それよりも……遠坂はマスターって奴なのか？

いったい、何が起きてるんだ？」

「魔術師ってなんなんだい？」

衛宮はなんか知ってるみたいだね。

さっきの物騒な奴は何なんだい？」

「ちよつと待つて。

衛宮くんは良いとして、綾子……あんた魔術師じゃないの？」

「あつああ、私は魔術師なんてものじゃないよ。

ただ、こいつやあの黒いのがただの人間じゃないって事は分かるけどね」

美綴がフェイクを指差しながら言った言葉に遠坂は頭を抱える。

美綴はただ巻き込まれただけの一般人。

ついでに士郎は魔術のド素人で聖杯戦争の事など何も知らない様だ。

つまり……

「じゃあなに？」

私は、今日周りを確認する事を怠ったせいで2人も無関係の人間を巻き込んだわけ？」

「まっ、そうなるわな。

んで持つて、今ではその内1人は晴れてマスターに為った訳だ」

青い男は獣が獲物を見る様な視線をフェイクに向ける。
フェイクはそんな視線を無視しながら事の成り行きを見続ける。

「はあ……衛宮くんだけならあいつの所に連れてって現実を叩き付けるだけで良いけど……綾子と一緒に話がかわるわね……」
綾子、衛宮くん、まずは衛宮くんの家に向かいますよ。そこで、貴方が何に巻き込まれたか教えてあげる」

遠坂とランサーは士郎の返事も聞かずに衛宮邸へと足を向ける。

「……フェイク」

士郎と美綴はフェイクの意見を求める様に視線を向ける。

彼は遠坂を敵だと言っていた。
そして、自分達を助けてもくれた。
なら、彼の意見を仰ぐべきだと2人は考えた。

「……今は彼女を信用しても構わんだろう。
少々、うっかりした所もあるが……マスターと違って極めて優秀な
魔術師の様だ」

「なんだよ。俺がお前のマスターって奴に相応しく無いって言うのか？」

「くくく、いやいや寧ろ逆だよ。

キミ程、私の様な欠陥品のマスターに相応しい者はいない」

士郎はフェイクの言いように少しムツとした。

自らを欠陥品と名乗る男に何となく苛立ちを感じたのだ。

美綴も何処か気に食わないと言う表情をしながら、フェイクの前に立つ。

「ちょっと、さっきのは聞き捨てらんないね。」

「なんで、自分の事を欠陥品なんて卑下するんだい？」

「……私は、ある男の姿を借り受けた劣化コピーだからな。」

「聖杯とて、私のクラスをアーチャー「弓使い」ではなくフェイク「偽物」と名付けた。」

「なかなか、皮肉めいていると思わないかね？」

「話はここ迄だとフェイクは2人に背を向けた。」

「それは、これ以上聞くなと言う心の壁に2人には見えた。」

最強のサーヴァント（前書き）

こんばんは、偽道です。

題名は最強のサーヴァントですが、そのサーヴァントが本格的に参戦するのは次話からです。

では、どうぞ……。

最強のサーヴァント

衛宮邸に着くやフェイクは屋根へと登っていた。

彼曰く「遠坂 凜は魔術師らしく無い甘さがある……たぶん。故に不意討ちをして来る事はない……かもな」

所々自信なさげだったのが妙に印象的な言葉だった。

「まずは綾子、貴女は今ならまだ引き返せるわ。

まあ、魔術師に関する記憶は消させて貰うけど」

「……まずは、話だけ聞いてみるよ。

記憶を消すか消さないかはそれからだね」

「妥当な判断ね。

じゃあ、あまり長く話せば記憶の操作も大変になるから、聖杯戦争に関してだけ説明するわよ」

士郎と美綴はその言葉に頷く。

それを見た遠坂は聖杯戦争に対して簡潔な説明をした。

両者の反応は遠坂の予測通り“納得がいかない”と言う表情をしていた。

しかし、大きな反論が無いのは兎に角最後まで話を聞こうとしているからだろう。

「衛宮くんのアーマーチャーは遠距離からの狙撃を得意とするサーヴァントね」

「なあ、遠坂。

何であいつの事をアーマーチャーだと思うんだ？」

「簡単な消去法よ。」

現在、召喚されたサーヴァントは衛宮くんのアーチャーを混ぜて六騎。

ランサーは私が召喚したし、アサシンはさっき戦った黒い奴。

セイバー、ライダー、キャスターは既に召喚されている。

理性があるからバーサーカーでもない」

「だから、アーチャーか……でもさ、遠坂。

あいつ、自分はフェイクだって名乗ってたぞ？」

「フェイク？」

……そっか、事故みたいな召喚だったからイレギュラークラスが呼ばれたのかも。

悪いけど、フェイクなんてクラスのサーヴァントは私は知らないから……直接フェイクに聞きなさい」

遠坂はお茶を飲んだ後、厳しい表情のまま美綴に視線を向ける。

貴女はどうするの？

遠坂の目は美綴にそう問い掛けていた。

「悪いけど……私には無理だよ。」

あの黒いのやフェイクを見れば分かる……私には、これに関わる力も覚悟もない。

衛宮には悪いけど……私は……」

「いや、美綴が気にする事じゃない。

こんな馬鹿げた物に巻き込まれたい人間なんて居ない」

「そうね。じゃあ、綾子には悪いけど……」

遠坂が人差し指を美綴の額に付けると、美綴は眠る様に倒れた。おそらく、記憶を書き換えられたのだろう。

「衛宮くん、貴方は辞めたいと言えば辞める事の出来る立場にはいない事は理解出来る？」

「……納得出来るか。」

人の命をまるでゲームみたいにやりとりするなんて……」

「仕方ない……衛宮くん、行くわよ」

「へ？どこへ？」

士郎がきよとんと尋ねる。

遠坂は、この緊張感の無い表情に頭を抱えながら……

「教会よ。聖杯戦争を管理してるやつがいるから。あんたに現実を叩き付けて貰うの」

兄弟子である胡散臭い神父の顔をを思い出していた。

美綴を客間に寝かせた後、2人は新都を目指して歩いていた。

「それにしても……」

「ああ……」

士郎と遠坂は呆れた表情をしながら後ろを見る。
そこには……

「はっ、てめえ……たかが弓兵風情が斬り合いで俺に敵うとでも！」

「くくく、その様な驕りは捨てるのだなランサー。」

弓兵とて場合によっては剣を取り、槍を振るう。

それに、私はアーチャーではなくフェイクだよ」

「てめえ……ランサーである俺に槍でも挑めるってか!？」

「まあ、彼の湖の騎士には劣るがね。

有効と判断したならば槍を振るおう」

何か、仲が悪いのである。

何かもう、売り言葉に買い言葉。

最初に挑発したのは何方かさえ分からない内に何時の間にか勃発した悪口の言い合い。

「……遠坂、俺……英雄に対する幻想が壊れてきた……」

「奇遇ね……私もよ衛宮くん」

ついでにこの馬鹿2人は霊体化していない為、切嗣の服を借りている。

2人はフォーマルなスーツ着込んでいて……まるでホストの人みたいな印象を与えていた。

「しかし……ランサー。キミは優秀なマスターに恵まれて羨ましいよ。」

私は……少々心許なくてね……」

「……あー、あの坊主か。」

まあ、筋は良さそうだが……魔術師としちゃあ半人前だろうしな」

「半人前だと？」

キミの目は節穴かね。アレは素人当然だよ」

「あつ馬鹿！

聞こえてんだろうが……！」

「聞かせているんだ。」

今の現状を正しく認識して貰いたいのだね」

先程まで口論していた癖に次はフェイクの愚痴にランサーが付き合っていた。

なんか、仲が良いのか悪いのか分からない奴等である。

「……なあ、遠坂。」

俺ってそんなに……」

「ええ、へっぽこね」

士郎はがっくりと肩を下げた。

反論しないのはそれが真実である為だろう。

「ふん、貴様などホットドッグでも喰い散らかして溺死しろ」

「てめえ……その言葉を吐いた事後悔させてやる」

そして、馬鹿2人はまた口論を開始した。

闇夜に雪の様な銀髪を光らせる少女と金髪で男物のスーツを着た少女が立っていた。

「仕掛けますか……イリヤ」

「まだ駄目だよ。」

お兄ちゃんには、まずは現状を知って貰わないと」

銀髪の少女……イリヤは、男装した少女に返答する。

「分かりました。」

しかし、良いのですか？

幾ら血が繋がって無くとも彼は貴女の弟だ」

「……私はね。切嗣とお兄ちゃんを殺しに来たんだよ？」

「……そうでしたね。」

何方にしても、いずれは敵対する者達だ」

「そつだよ……セイバー」

士郎達は気づかない。

彼等の数メートル後ろに無邪気な復讐者と最優のサーヴァントがいる事に……。

最強のサーヴァント（後書き）

美綴は一度戦線離脱します。

最初は教会迄連れてって言峰の保護下……とも思いましたが、そうなる話に絡ませられませんので……。再び参戦するのは当分先です。

しかし、バーサーカーどうしよう？

いっそ、フェイクはアーチャーじゃ無いからと苦しい言い訳してキヤスターにエミヤを召喚させようかな……。

最強のサーヴァント？（前書き）

今晚は偽道です。

なんか、セイバーを強くし過ぎた感がありますが……まあ、敵になつたらつよくなる法則という事で勘弁してください。

では、どうぞ。

最強のサーヴァント？

士郎は教会を出てから終始黙っていた。

いや、己がサーヴァントに戦う覚悟は告げてはいる。

だが……教会の神父、言峰 綺礼に言われた事がどうしても頭に残っていたのだ。

「戦う覚悟をした割には随分と覇気が無いな」

フェイクは訝しる様な視線を士郎に向けた。

覚悟の言葉は確かに受け取ってはいる物の完全に信用してはいないのだろう。

「フェイク、正義の味方になりたいという理想は悪の登場を欲する事と同等の願いだと思っか？」

「……」

何故、こいつにこんな事を聞こうとしたのか？

士郎は自分でもその理由が解らなかった。

「ふむ、なかなか面白い考え方だな……それは。

確かに正義の味方は悪の存在が不可欠だ」

その言葉に士郎は軽い目眩を覚えた。

やはり、正義の味方を目指す事は……。

「だがそれは、正義の味方と言う“称号”を目指した場合だ。

マスターは不幸に巻き込まれた人、巻き込まれそうな人を救いたい。

笑顔を守りたいのだろう？」

「……………それが何処か違うのか？」

「ああ、キミは正義の味方と言う“称号”を目指しているのかね？
それとも、正義の味方と言う“存在”を目指しているのかね？」

訳が分からない。

フェイクは後は自分で考えろとだけ告げて霊体化した。

空気が変わった。

そうとしか、形容出来ない殺気に包まれる。

「こんばんは、お兄ちゃん、リン」

声のした先にいたのは子供だった。

いや、問題はそこでは無い。

真の問題はその子供の横に静かに佇む男装の少女。

アレは、人間では無い……………。

「はじめまして。」

わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「アインツベルンですって！？」

遠坂はその名に驚愕する。

「知っているのか遠坂？」

「ええ、アインツベルンは聖杯の入手を宿願とする魔術師の家系。毎回この戦いにマスターを送り込んできてる奴らよ」

「ねえ、もうお話終わり？」

イリヤはクスクスと無邪気な笑顔を浮かべながら問い掛けて来る。男装の少女も、何時の間にか青いドレスと銀の甲冑の姿へと変わり主の命を待つ様に立つ。

「……ランサー、マスターを頼むぞ」

「ああ、任された。

さっさと本業に戻りな弓兵」

二騎のサーヴァントは何時の間にか共闘すると決めた様だ。だが、あの強大な威圧感放つサーヴァントの前でそれはどれ程の意味があるのだろうか？

「もう、いいよね…… やっちゃえ、セイバー！！」

「承知しましたイリヤ！」

「ランサー！」

「フェイク！」

「あいよ、そんじゃ……いくぜー！」

「まあ、期待に添えるところでしょう」

ランサーはセイバーへと駆け、フェイクは後方へと消える。
ガアアン と大きな鉄と鉄がぶつかる音と共に片方が勢いに耐え切れずに吹っ飛びコンクリートの壁に打ち付けられる。
吹っ飛んだのは、小柄な少女では無く……。

「ぐっ……対した剛剣だな…セイバー！」

ランサーの方だった。

セイバーはチャンスとばかり士郎へと斬りかかるうとするが何処からともなく飛んで来た剣に阻まれる。

「成る程、対した弓の腕だアーチャー。しかし……」

二射目がセイバーへと迫る。

「このような攻撃、私には通用しない!!」

しかし、その剣は不可視の剣に迎撃された。

「ちっ！」

ランサーはセイバーに再び槍を向ける。

最速のサーヴァントによる神速の無数の突きとフェイクの鋭い矢がセイバーに迫る。

しかし、その神速の突きと矢すらセイバーは絶妙なタイミングで捌ききり、ランサーに反撃すら放つ。

それは、最優と言う名に恥じぬ戦い。

「はっ、いいねえ……最高だぜセイバー。
この聖杯戦争は最高だ。
アサシンもお前もどっちも面白え……!!」

「口が達者なようですが……貴方もサーヴァントなら、その槍で語
つてはどうですか?」

「ハハッ……いいねえ。
ブチかますぜマスター!!」

ランサーの言葉の意味を遠坂は正確に受け取る。
つまり、ランサーは宝具を使うと告げているのだ。

「それしか無いわね……いいわよ。
やりなさい、ランサー!!」

瞬間、ランサーの槍先に禍々しい殺気が集中していった。

一方、その戦場より2km先。

「やれやれ……ランサーは戦闘狂か。

確かにセイバーを相手にするならその手も有効だがね」

フェイクは弓の弦をキリキリと引き絞る。

その手には螺旋状に捻れた剣。

そして、フェイクは標的を見据える。

そう、イリヤスフィールへと……。

オマケ

「ハハッ……いいねえ。

ブチかますぜマスター!!」

ランサーの言葉の意味を遠坂は正確に受け取る。
つまり、ランサーは宝具を使うと告げているのだ。

しかし……

「駄目よ……ランサー」

「ちっ……仕方ねえな」

宝具の真名を解放する。

それはつまり、自らの正体を晒す事を示す。

それは、まだ早い……。

「宝具を使わないのですか……ランサー」

「マスターの意向でな」

再び二騎のサーヴァントが打ち合う。
しかし、先程と違うのはフェイクの援護が無い事。
士郎は、それを不思議に思い……後ろを振り返ると……

見える筈のない2km先のビルの上弓に螺旋状の剣をつがえた
フェイクの姿があった。

その狙いはサーヴァントの少女では無く……マスターであるイリヤ
と名乗る少女。

「イリヤ!!」

既にあいつは矢を放ってしまった。

このままではあの子は死ぬ……。

「っ!?!」

そんな事は許せない。

イリヤへと駆け寄る。

早くあの矢より先に彼女を……。

「アーチャーのマスター。勇敢と蛮勇は違いますよ」

「え?」

ピシヤリと血が飛び散る。

胸を見れば不可視の剣は赤く染まっていた。

「あの……馬鹿!」

死ぬことは理解出来る。

セイバーがフェイクの放った矢を迎撃された時、自分の行動は無意味だったなと思った。

視線をフェイクのいるビルに向けると呆然とした様な表情で立っていた。

その姿に……とても大きな罪悪感を抱えながら……意識を喪った。

最強のサーヴァント？（前書き）

こんにちは、偽道です。

しかし、文章力がまったくないなと思う今日この頃……。

駄文ですが、それでも良い方どうぞ……。。

最強のサーヴァント？

青き槍兵の朱槍に膨大な魔力と殺気が集中する。
未熟者と呼ばれる士郎にだって分かる。
アレは、絶対に避けられない。

あのアサシンに狙われた時だってここ迄明確な死の気配は無かった。

「じゃあな……その心臓、貰い受ける！！」

セイバーはその槍に向かい打たんと剣を青眼に構える。

「刺し穿つ……」「ゲイ……」

ランサーの朱槍はこれ迄よりもより速い突きを下段に放つ。
セイバーはそれを避け上段から斬り伏せようとするが……。

条理を不条理へと変えてこそ宝具。

その程度の事で朱槍の呪いからは逃れられない。

「死棘の槍「ボルグ」！！」

朱槍は空間を捻じ曲げ、心臓を穿たんとセイバーへと迫る。
威力も派手さも無い。

しかし、正しく必殺の一撃がセイバーへと迫る。

「セイバー！？」

そして、槍はセイバーを貫く。

因果の理を捻じ曲げしゲイ・ボルグ。

“ 心臓を穿つ ” と言う結果を “ 槍を放つ ” という原因より先に生じる魔槍。

故に、放つ時には心臓を穿つと言う結果が決まっている回避不能の一撃必殺。

ランサーと遠坂は勝利を確信し、イリヤですら敗北に膝を崩す。

……だが、その不条理すら乗り越えてこそ剣の英雄。

「 なっ!?! 」

倒れゆく身体は途中で踏み止まる。

驚きの言葉は誰の物か？

最優の騎士、セイバーは傷こそ負ったものの朱槍の呪いに打ち勝つたのだ。

「 ……かわしたと言うのか？我が必殺のゲイ・ボルグを!! 」

「 ゲイ・ボルグ……ならば貴方の真名はアイルランドの光の御子、クー・フリーン!?! 」

ランサーは屈辱に顔を歪め、遠坂はあまりの非常識すぎる力を持つセイバーに後ず去る。

これがセイバーのサーヴァント……。

マスターの腕も良いのだろう。

セイバーの傷は今も着々と治されて行く。

「 今の内に逃げなさい衛宮くん 」

だから、遠坂はそれしか言えなかった。

「ふざけるな！」

遠坂を見捨てて逃げるなんて……」

「衛宮くん、今を見たでしよう？」

見た目は兎も角、セイバーのサーヴァントは化け物よ。

貴方はただ巻き込まれただけ。

だから、令呪を破棄して教会に逃げ込めば……」

それは、甘い誘惑。

確かにそれならば生き延びる可能性は格段と上がる。

セイバーのサーヴァントは見た感じ高潔な存在だ。

戦いを放棄した者まで手にかける事は無いだろう。

だが……

「駄目だ！」

ここで遠坂を見捨てる事は出来ない……」

それは、正義の味方がする事ではない。

「ここ迄、俺を助けてくれた遠坂を見捨てたら……俺は俺自身を救
す事は出来ない……」

だから、俺は俺の出来る事をする。

それが、土郎の出した答えだった。

(フェイク！どうかセイバーの足止めは出来ないか！?)

(……マスターさえ始末すれば足止め処か退場させる事も可能だが?)

フェイクの意見はこの聖杯戦争では正しい。
サーヴァントが無理ならマスターを。

その選択は間違っではない。

(悪いけどそれは却下だ。

あんな小さな子を殺すなんて許さないぞ)

(……仕方ない。令呪を使われても厄介だ。

マスター、存分に魔力を使わせて貰う。

未熟なお前ではおそらく……いや、十中八九倒れるだろうがな)

(頼む、フェイク)

次の瞬間、青い閃光がセイバーを襲う。

セイバーはそれを斬り捨ようとするのと同時に剣が爆発する。

「遠坂、フェイクが時間を稼いでいる内に!」

「えっ……ええ、ランサー!」

「まあ、仕方がないわな……」

遠坂と士郎はランサーに抱えられながらその場から離脱する。

フェイクの宝具の威力は予想よりも遥かに強力だった。

だが……それよりも……。

「くっ!？」

あの威力を受けながら尚も倒れないサーヴァント。
立て続けに襲い来る矢を捌ききるその姿は最早最優では無く最強。
それにしても、何故かさつきから意識が朦朧としている。
どうしても、意識を保つ事が出来ない。

「ごめん……遠坂。少し……眠る」

「……まあ、仕方ないわね。」

英霊の召喚に加えて宝具の使用。
寧ろ、今迄気を喪わなかった事を褒めてあげるわ」

士郎はそんな遠坂の言葉最後に聞き意識を手離した。

立て続けに降り注ぐ剣の雨。

先程迄の矢に比べ、それは1つ1つが致命傷を与える脅威へと姿を
変えていた。

「成る程、前回のアーチャーとは違う。

コレが、本来のアーチャーの戦闘手段か」

相手の視界に留まらぬ距離より、一方的に攻撃を加える。
成る程、コレは脅威だ。

「まるで、切嗣とでも戦っているみたいですね」

最初の一撃。

あの威力は脅威だった。

あと、二射……同じ矢が飛んでくれれば間違いなく自身は消える。
それ程の脅威がアレにはあった。

「……つまんない。行こうセイバー」

「……そうですね。」

このままでは、永遠に決着がつかない」

セイバーは剣の鞘を開放する。

「風よ……!!」

その風の壁はフェイクの矢を悉く弾き、風が止む頃には既にセイバーとイリヤの姿は消えていた。

「逃げられたか……」

最初の一射でマスターを射抜けばそれでセイバーとそのマスターは退場していた。

この聖杯戦争の犠牲を最小限にするならば、それはけして間違った

手段では無い筈だった。

「あれが……アルトリア。

本来の歴史での士郎さんのパートナー……か」

フェイクは夜空を見上げる。

思い出すのは風の鞘を解放する際に一瞬見えた黄金の剣。

「エクスカリバー……か。

まったく、生前から私は他人の記憶に振り回されてばかりだな」

あの剣を見た時に感じた懐かしさ。

おそらく、この身を模っているあの人の記録なのだろう。

「セイバーのサーヴァントよ。

キミが敵に周るのならそれで構わない。

私は……ただ貴様を射抜くのみだ」

やり難い相手ではある。

しかし、敵ならば射抜く。

でも……問題は……。

「マスターだよな……」

犠牲を容認する自身と例え敵でも犠牲を嫌うかつての憧れ。

自分とは違い過ぎる程純粋に真つ直ぐと歩もうとするマスター。

それ故におそらく近い未来に自分とマスターは衝突するだろう。

「さて……その時どうなるかな……」

最強のサーヴァント？（後書き）

バーサーカー……。

今の所の候補はヴラド三世とか李書文とかランスロットとか……。でも、やっぱり魔力的に考えるとバーサーカーは難しいかな……。魔力喰いのバーサーカーをキャスターが召喚するとも思えないし……。やっぱりアーチャー？

殺意と狂愛（前書き）

偽道です。

今回のタイトルも次回からっ……て感じですよ。

サーヴァントですが、バーサーカーにしました。
月姫キャラです。

アルクでもワルクでもありません！

では、どうぞ……。

殺意と狂愛

俺はまた不思議な夢を見る。

そいつは才能の欠片も無い魔術師だった。でも、そいつ才能が無い事を言い訳にせず、何時も自分の命を掛けてギリギリの戦いを演じ、何時も多くの人を救っていた。だけど、何時だってそいつは誰かを救えずにいた。

「また……救えなかった」

それは人が人である限り当然の事。

人間には限界がある。

全てを救うなんて、出来ないのだろう。

何時しか、そいつにとってそれは当たり前の事に為った。

子供だったそいつはたった1つの理想と約束に向かって走り続けた。

草原を炎で焼き、青空を茜色に染め……。

剣の連なる孤独の丘へと……。

「……夢？」

士郎は、朝日が眩しそうに目を細めながら起き上がる。その表情は何処か納得のいかない表情で、口惜しそうに唇を噛む。

「……………あんなのはあんまりだ。
アレじゃあ……………あの子が救われない」

夢に出て来たのは昨日夢に見た少年の成長した姿。見た目からすると……………おそらく10〜12歳。そんな子供が世界の災害を止め様と、全ての人を救おうと頑張っていた。

少年は頑張った。
頑張って頑張って頑張って頑張って頑張りが抜いた。

でも、現実には物語の様な甘くない。
少年はもとより救えなかった人も、救える筈だった人も……………誰一人も救えなかった。

「あんな子供が……………頑張った結果に得た答えがあんなの何て……………
全ては救えない。
だから、最小限の犠牲を強いる。
本当なら、それは最初から気付くべきだった。

そう、自らに言い聞かせながら……………。

「何時まで惚けているのだ、マスター」

「うおっ!?!」

フェイク、いきなり出てくるなよ!」

「くっ、この程度で驚くとは……まだまだ未熟だなマスター」

突然、幽霊の様に枕元に現れた我が憎たらしいサーヴァントが皮肉を言いながらも嫌味つたらしい事を言ったださいやがった。

普通、いきなり現れたら驚くだろうと言う抗議の視線もなんのその……フェイクはさも同然の様に肩を竦め……。

「起きたのなら、早々に居間に行くといい。

何処その悪魔がキミの目覚めを待っている」

と、不吉な言葉を残して消えた。

悪魔とは誰なのか……？

もしかして、昨日から俺の幻想「憧れ」をこれまでに無いスピードでぶち壊し続けている遠坂の事か？

士郎が居間に着いた時に見たのは……確かに悪魔だった。

それはもう、綺麗な笑顔で……

「ちょっとお話ししましょう衛宮くん。大丈夫、ちょっとぶっ血Ki
11だけだから」

と言う、そんな笑顔……。

「あのさ……遠坂、俺……お前に何かしたか？」

「いえいえ、何もされていませんわよ衛宮くん。
ただ、昨日貴方が何を学んだのかなあ〜とか、何でフェイクにあんな命令をしたのかなあ〜 何て思っているだけですよ」

遠坂は額に青筋を作りながら、そう言っただけで来た。

今の遠坂の丁寧な言葉は怖い。

昨日の内に本性を知って仕舞った士郎にとって今では、優等生の言葉使いは恐怖の対象でしかない。

「何か悪かったのか？」

あの場面では、フェイクに頑張っただけで貰うしか無いと思ったんだけど……」

「ええ、その指示は的確よ」

頭を傾げるしかない。

それ以外で昨日失敗するような場面はあったのか分からない為に。

「……………呆れた。」

士郎、貴方本当に分からないの？」

「むっ、じゃあ遠坂は何が悪いつて言うんだよ？」

「ねえ、士郎。貴方、何でフェイクにマスターへの攻撃を辞める様に指示したの？」

士郎は、遠坂の言葉に一瞬耳を疑う。

遠坂は……………今、何と言ったのか……と。

「……その顔、本気で分かってないのね。
はあ、これじゃあ綺礼の所に連れて行った意味がないじゃない」

「同感だ。ランサーのマスター。
私も聞きたい……何故、あの様な指示を出した」

突然、背後に現れたフェイクは遠坂に賛同しながら士郎に問い詰める。

「……じゃあ、お前はあの子を殺すべきだったと言っのか？」

「当然だ。彼女は殺し合いを楽しんでいた。

ならば、アレは切り捨てるべき存在……倒すべき敵だろう。
それとも……昨日の宣言は口から出任せかね……マスター？」

「ふざけな……！」

あんな小さな子を殺すなんて出来るか……！」

「……ふん、ならばどうする？」

あの子供を信じると？

あの子供を説得するだけでも？

甘えるなよ衛宮 士郎……。現実……優しくない」

「そんなの、やってみなきゃ分からないだ……ストップ、もう、良
い加減にしたら？」

遠坂は士郎とフェイクの間に割って入り、2人の口論を止める。

「フェイク、ちょっと消えててくれるかしら？」

貴方の言い分は正しいと思うけど、今の士郎には届かないと思うわ」

「……やれやれ、召喚に応じたのは失敗だったやもしれんな」

フェイクは肩を竦めながら消える。

何処か、独特な雰囲気も無くなった事から居間の外に出たのだろう。

「士郎……あなた、そんな態度を続けていたら自分のサーヴァントに殺されるわよ」

「どう言う意味だよ……遠坂」

士郎は不思議そうな標準で遠坂に聞く。

「昨日も話したけど、サーヴァントは聖杯を求めて召喚に応じた英霊よ。」

そのサーヴァントが、もしも召喚したマスターが聖杯を求める気も戦う気も無いと知ったらどうなるかしら？」

「……遠坂は、フェイクが俺を殺すと言いたいのか？」

「そうなる可能性もあると言いたいだよ」

背筋に冷たい氷が入れた様な寒気を士郎は感じた。

遠坂が言った事は現実になる可能性はあるだろう……。

ただ、それは聖杯では無く……別の要素が噛み合った場合だと言う予感をしながら。

士郎が目覚める時間より少し時を巻き戻そう。

「本当……再会には良い月だ……」

「ええ、本当に。」

最後の夜もこんな綺麗な月でしたね……兄さん」

月光の下、柳洞寺の山道で漆黒の殺人貴は漆黒の髪の間番に笑い掛ける。

「ああ、本当に……」

殺人貴はごく自然に短刀を取り出す。

間番の髪は美しい漆黒から、全てを呑み込む様な赤へと変わる。

「なあ、何でお前はサーヴァントに為った？」

「イレギュラーな召喚の所為ではないかと。」

私は、兄さんとは違って多少力のある亡霊に過ぎませんから」

一歩一歩慎重に殺人貴は間番に近付く。

まるで、相手の視界に入るのを警戒する様に。

「兄さん、覚えていますか？」

最後の夜を……」

「忘れる筈がない……」

殺人貴から既に表情は消えていた。
門番は狂った様に微笑んでいた。

「あの夜……私は……」

「あの夜……お前は……」

殺意と狂愛。

その二つが交差した瞬間……

「兄さんに殺されたのだから！」

「お前は琥珀さんを殺したのだから！」

兄妹喧嘩「殺し合い」が始まった。

殺意と狂愛（後書き）

と言う訳で、バーサーカーは秋葉です！

志貴と秋葉のセリフから気付いた人はいるかも知れませんが、琥珀ルートを選択肢で志貴が秋葉を殺した後の2人です。

秋葉は一応、狂化してはいますが……反転して元より狂っているの
で普通に話せたりしています。

狂化のランクが低いのもありますけど……。

では！

殺意と狂愛？（前書き）

偽道です。

……特に今回は書くべき事は無いかな。

では、ごんごん……。。

殺意と狂愛？

孤独な魔女は夢を見た。

それは誰もが望み、誰もが当たり前のように有している物…。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

愛している人と共に生きたい。

「――Anfang」

そんな、当たり前前の夢。

だけど、魔女はそれを得る方法が分からない。

だから、魔女はたった一つと思われる絆に手を伸ばした……。

「――告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

マスターとサーヴァント

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ―

「！」

その絆を守る為に、その絆に縋る為に、魔女は残り一つのクラス……
バーサーカーを呼び出した。

「どうしたのですか兄さん？

逃げてばかりでは私を殺せませんよ!!」

「……ぺちゃくちゃと良く喋る」

バーサーカーは歓喜に震え、アサシンはそれを冷めた視線で見据える。

アサシンにとってはこの戦場はあまりにも不利。

この山道はサーヴァントに取っては鬼門である。

脇の森に逃げ込めば自分の力は削られるであろうし、だからと言ってこの見栄えのいい階段は視界に入りさえすれば相手を略奪する赤毛からは逃れ難い。

何より……

「あははははははは、どうしたのですか兄さん？

まるで、本気を出せないみたいじゃありませんか!!」

その通り、今のアサシンはマスターの令呪により全てのサーヴァントを殺す事が出来ない。

それは、彼に取っては最大級の難関と言ってもいい。

そもそも、アサシンの得意とする戦闘手段は不意打ちや暗殺……相手がこの眼の力に動転して冷静差を喪っている間に勝負を決める事だ。

彼は生前から真っ向勝負で勝てた試しは殆ど無い。

だいたい、この眼は確かに魔術的価値は高いだろうが事戦闘となれば、相手が化物でもない限り拳銃の方が強力で効率のいい武器になる。

「これはどうですか兄さん？」

空気が氷の様に冷たくなる。

視界の全ては赤、赤、赤。

バーサーカーの髪が辺り一面の物を略奪し始めたのだ。

(アサシン、退け)

その、戦闘続ける事が難しくなった頃に、彼のマスターから撤退の命令がくだる。

アサシンは一瞬だけその命令に躊躇した。

バーサーカー……いや、遠野 秋葉だった物はアサシンにとってこの世で最も解体したい存在だ。

しかし…

「……ちっ」

最も解体したい物は、最も叶えたい願いではない。

アサシンにとっての大切な「琥珀」。

その人を救いたいからこそ召喚に応じたのだ。

ならば、今のアサシンにとって重要なのは意地でも生き延びるコト。

難しい事ではない。

目の前の化物はその場から動かない……いや、動けない様だし……敏捷B+の能力は伊達ではない。

そう考え、アサシンは自分の後方を包囲する髪を一薙ぎし、逃亡する。

「逃げられると覚っているのですか……兄さん……！」

アサシンはナイフを右手から左手に持ち変える。

武器を使わせない様に拘束したかったのだろう。

赤い髪はアサシンの今迄ナイフを持っていた右手に絡まる……が、それを左手のナイフで解体。

後は、もう追撃が来ても無駄だ。

アサシンはそのまま、走り去る……

「そこ迄……あの泥棒猫がいいのですか……兄さああああん！
！」

その背後から聞こえる化物の怨嗟など聞こえぬとも言う様に。

アサシンは教会の門を開き奥へと進む。
途中、男装の麗人の死体が視界に入る……。

バゼット・フラガ・マクレミッツ

本来、アサシンと共に聖杯戦争を駆ける筈だった存在。

アサシンは彼女の前で一瞬だけ立ち止まる。
だが、すぐに興味を失った様に立ち去る。

確かに、バゼットはアサシンにとって好ましい人柄だった。

だが、彼女は死んだ。
油断し、不意打ちされて死んだ。

そして、彼女のサーヴァントたる自分は、令呪を使用される事も無く自らあの男の軍門に降ったのだ。
ならば、アサシンがバゼットの冥福を祈るなど図々しいだろう。

「今戻った……マスター」

「ふむ……よくやったアサシン」

アサシンは心にも思っていないであろう賛辞の言葉を受け取るとすくなく霊体化した。

アサシンの願いはただ一つ。

大切な人「琥珀」を救う事……。
その障害になる物なら全て解体し尽くす。

それが、大切な一の為なら、九と敵対出来る彼の……遠野……いや……

七夜 志貴の覚悟だった。

士郎は遠坂との会話を終えた後、屋根な上上がった。

「どうしたのかね……マスター？」

「お前に聞きたい事がある」

それは、どうしても聞いて置かなければならない。

「お前は、聖杯に何を願うつもりなんだ？」

「その前に私の質問に答えるマスター！。

お前は……衛宮 士郎は聖杯に何を望む？

過去のやり直し、或いは死者の蘇生か………？」

突然、フェイクから異常とも思える程、大きな殺気を向けられた。恐らく、答えによっては彼は自分に剣を向けるだろう………。

「俺は……聖杯なんて要らない。

過去のやり直し何か望まない。

死者は蘇らない、過去は変えられない……！

……そうだ、失われた命は戻らない。

過去を変えらると言う事は……今迄の人生を全て嘘にする。それは、それに関わった人々全てに対する裏切りだ」

フェイクはその言葉に満足いったのか、笑みを浮かべる。

「認めよう、衛宮 士郎。

キミは魔術師としても、戦闘者としても未熟だが……私には勿体無いほどマスターとしては合格だ」

また、何処か自分を卑下する様な口調で喋るフェイクに士郎は眉間にシワを寄せる。

「それより、俺は質問に答えたんだ。次はお前のばんだろ」

「そうだな。

なに、私の目的はマスターと敵対する様な物ではない」

そして、フェイクの口から彼の目的は告げられた。

「争いの元となる聖杯……その破壊こそ私の目的だよ」

殺意と狂愛？（後書き）

この小説の七夜 志貴は、メルブラや歌月十夜の志貴の不安などの存在では無く……志貴が遠野と決別する為に名乗った名です。

では、また次回！

日常（前書き）

偽道です。

今回から、土郎視点をメインにしてそれ以外は第三者視点にします。

そして、久々に本小説のヒロインかもしれない美綴さんが出てきます。

……影薄いけど。

では、どうぞ！

日常

「衛宮くん……本気？」

遠坂の顔が般若の様な凄い表情へと変わる。

滅茶苦茶怖い……何か俺は重大な選択技を間違えたのでは無いだろうか？

ほら……何か俺の背後で虎とブルマが手を振っている気がする。

でも……

「本気だぞ……俺は。」

遠坂とは組めない。俺の目的と遠坂の目的は違いすぎる」

「……………」

「へえ……いい覚悟じゃねえか」

遠坂の表情は無表情へと変わり、ランサーは面白い物でも見る様に目がキラキラと光る。

「いいわ。でも……次に会った時は私達は敵どうしよ……」

「ああ、分かってる……その時は手加減はしない」

「そう……」

遠坂はそれだけ呟くと、すぐに席を立つ。

「衛宮くんの目的が何かは分からないけど……最後に忠告しといてあげる。」

敵のマスターに同情などしない事ね。昨日みたいな事ばかりしてる……そう遠くない何時か…死ぬわよ」

それだけ言うと、遠坂は家を出た。

遠坂は本当にいい奴だと思う。

今後、敵になる俺の事を心配までしてくれた。

「彼女を帰してよかったのかね？」

「何だよ……遠坂と手を組む訳にはいかないだろ？」

遠坂は聖杯を求めてこの戦いに参加している。

なら、聖杯の破壊を目的とする俺達と一緒に戦う訳にはいかない」

「まあ……そうなのだがね……」

フェイクの言葉は何処か歯切れが悪かった。

「マスターも彼女も忘れてる様だが……」

「何だよ……」

「私は……キミの学友が何処まで記憶を消されているか分からないのだが……マスターは把握しているのかね？」

「……………あっ」

完璧に忘れていた。

そうだ、今この家には美綴がいる。

しかも、記憶をどれ程消されているのかも分からない。

「士郎……おっはよ……！」

「なにっ!？」

「げっ……藤ねえ……」

しかも、不運とは連鎖する物なのだろうか？

フェイクが霊体化する間も無くガラリと戸を開けて虎が来訪した。

それでも彼は何とか対応しようとしたのか赤い外装と黒い軽鎧を消した黒いノースリーブの姿に為っていた。

この姿なら、何とか現代人の格好だと言っても通じるだろう。

「あれ、桜ちゃんは？」

キヨロキヨロと居間を見回す虎を目の前にフェイクは冷汗をかいていた。

「欠陥品と言えど、英霊たる私が彼女の気配に気付かなかつただと」と呟いていたが、虎が相手なのだから仕方がない。

「桜ならまだ来てないぞ」

「あれ?でも……玄関に女性物の靴があったよね?」

どう考えても美綴の靴だ。

「ん、おはよう衛宮。」

藤村先生もおはようございます」

「あつ、美綴さんおはよ〜」

更に爆弾投下。

美綴が普通に居間へ入って来たのだ。その雰囲気から、美綴はここにいるのに戸惑いが無いのは見て取れる。

でも……何故か虎は爆発しない……。もしかしたら……このまま流せる？

「……フェイク」

「承知している……マスター。あの手の手合いは流せるなら流すにかぎる」

フェイクも同じ意見だったのか、すぐに意思疎通が出来た。

「それじゃあ、美綴と藤ねえは少し食卓で待っていてくれ。今から朝食を作るから」

「ふむ……私も手伝おう」

「いいのかい？」

「じゃあ、お言葉に甘えるよ」

「うんうん、美綴さんも土郎の料理には期待しても大丈夫よ。すっごく美味しいんだから」

あははは〜 と笑いが居間に溢れる。

このまま、平和的に済めば……

「……て、何で美綴さんが此処にいるの!!
このガン黒のガタイの良い人は誰なのよおおおお!!」

世の中はそんなに甘く無かった。

「あゝ藤村先生、それにはちょっと訳があつてさ……」

「むっ、美綴さんが士郎の家に泊まらなきゃならない理由って何なのよ」

「昨日、間桐がサボった弓道場の掃除をしてたんですが……その帰りにナイフを持った不審者に襲われて……」

そこ迄はだいたい昨日起きた事と差程差異はない。
藤ねえも大人しく聞く事にした様で静かに聞いている。

「その時にこの人に助けて貰つたんです」

そう言つて美綴はフェイクに視線を向ける。

「ええ、あの時は驚きましたよ。」

久しぶりに恩人に会いに来てみればその息子さんとその子が襲われていたのだ。

誰だお前?

そんな風に思つた俺はおかしいのだろうか?

昨日から、嫌味と皮肉と自己嫌悪しかしない男がとても爽やかな笑みを浮かべて嘘を並べだした。

「恩人……て、切嗣さん？」

「ええ、切嗣には何度もお世話に為っていましたので。自己紹介が遅れましたね。

私はフェイクと言う者です」

「これはご丁寧に、そっか、切嗣さんは海外に飛び回ってたからね」

確かに切嗣は家を空けて海外へと行く事が多かったから、そういう交友関係があつても不思議じゃない。

「で、美綴さんをあのまま外を連れ回すのも危険だと思いましたが一泊させたのですが……」

「そう言う事なら仕方がないですよ。

寧ろ、士郎と美綴さんを助けてくれて有難うございます」

「いえ、当然の事ですから」

どうやら話は上手く纏まってくれた様だ。

「先輩、遅くなつてすみません！」

朝食を作り終えた時、桜が居間へと入ってきた。

急いで来たのだろう……肩で息をしている。

「大丈夫だよ桜。」

寧ろ、何時も俺の方がお世話になってるんだ。たまには寝坊しても罰は当たらないぞ」

すみませんと言いながら席に着く桜に苦笑しながら出来た朝食を運ぶ。

桜は美綴とフェイクの存在に驚いたみたいだけど、その説明を藤ねえに聞いているみたいだ。

「マスター……あの少女もマスターの家族かね？」

「ん……そうだよ。」

桜は少し前から家の家事を手伝ってくれている妹分だ」

そうか と呟いたフェイクは何処か苦しそうな表情をしていた。

その視線の先には桜の姿がある。

「桜がどうかしたのか？」

「……いや、何でもない」

フェイクはそれだけ言うつと居間の戸へ手を掛ける。

まるで、此処にはあまり長く居たくないとも言つ様に……。

「あれ、フェイクさんは食べないの？」

「ええ、少々予定がありまして……朝食摂る時間は無いみたいです。私の分は貴女に進呈しよう」

やった〜 と手を挙げて喜ぶ虎にフェイクは苦笑しながら去った…。
おそらく、また屋根の上に登ったのだろう。
桜の何がフェイクにあんな態度を取らせたのだろうか？

俺には……それが分からなかった。

「参ったな……」

フェイクは自重気味に呟く。

間桐 桜

彼女は彼を模っている姿の記録に色濃く刻まれている。
だが、それは親愛の情ではない……どうにも出来ない程理不尽で苦しい悲しみ……。

初めて…… が切り捨てた大切な一。

「……仕方がない……だろうな」

の記録では、彼女が暴走するのは第六次聖杯戦争。
つまり、今回ではない。

ならば、もしかしたら……今回の戦争で聖杯を完膚無きまでに破壊すれば、その悲劇を止められるかもしれない。

「本来の力が発揮できずマスターは戦力外……更には、土郎さんに違和感を与えぬ様に聖杯の器をも破壊しなければならぬ……なかなか厳しいオーダーだが……守護者には丁度いい」

聖杯の器……イリヤスフィールの顔を思い出し、一瞬吐き気に襲われる。

「そうだったな……私が他人を直に手を下したのはただ一度のみ」

生前は明確な殺意の下戦った事はあっても誰も殺さなかった。

災害が起きた時、助けられない一を見捨てた事もあったが直接手を下した訳ではない。

死後は何人も殺したが……そこに自らの意思はなかった。唯一、自ら手を下した男は不死身故に死んだ訳ではない。

だから、フェイクにとってこの殺しは初めてとなる。

本当なら、嫌だと嘆きたい。

本当なら、切り捨てたくない……。

「落ち着け……正義の味方に為ると定めた。

直接であるうとなかろうと多くの希望を踏みにじって来た。

ならば……今更、後に引く事など出来やしない」

知っていた筈の現実。

それでも手を伸ばした理想。

だから……

「聖杯を破壊する……例え、かつての憧れを裏切ろうとも……」

日常（後書き）

と言う訳で遠坂さんとの同盟を破棄しました。

士郎の性格だから、こう為るかな……と言う考えから。

フェイクですが……士郎の事を認めてはいますが、場合によっては裏切る気満々です。

これ以上書くとネタバレしそうなので此処迄にします。

では、次回！

サーヴァントのステータス（前書き）

今晚は、偽道です。

今回は士郎が今のところ入手したサーヴァントのステータスを書きました。

……ステータス書き終わって思ったのは、フェイクが雑兵だ……です。

プロフィールは申し訳程度にしか書いていません。

サーヴァントのステータス

クラス セイバー

真名 アーサー

マスター イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

属性 秩序・善

能力

筋力 A 耐久 A 魔力 A 幸運 B 敏捷

A 宝具 A++

クラススキル

対魔力：A

A以下の魔術は無効化。事実上、現代の魔術で彼女を傷つけることは不可能。

騎乗：B

大抵の動物を乗りこなしてしまう技能。幻想種（魔獣・聖獣）を乗りこなすことはできない。

固有スキル ????

宝具

風王結界「インジビブル・エア」

ランク：C

種別 対人宝具

最大補足 1個

エクスカリバー

ランク：????

種別 ????

最大補足 ????

プロフィール

おそらく、今回の聖杯戦争最強のサーヴァント。

その正体はアーサー王。

ランサーを圧倒し、フェイクの矢を簡単に斬り伏せるなど、圧倒的な力をみせた。

クラス ランサー

真名 クー・フリーン

マスター 遠坂 凛

属性 秩序・中庸

能力

筋力 B 耐久 A 魔力 C 幸運 D 敏捷

A 宝具 B

クラススキル

対魔力：C

第二節以下の魔術は無効化する。大魔術や儀式呪法などを防ぐこと

はできない。

固有スキル

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

宝具

刺し穿つ死棘の槍「ゲイ・ボルグ」

ランク：B

種別 対人宝具

最大捕捉 1人

プロフィール

遠坂 凛のサーヴァント。

戦いになると何処までも非情だが、普段の彼はカラッとした気持ちいい兄貴分的な存在。

フェイクとは性格の相性が悪いらしい。

クラス フェイク

真名 ????

マスター 衛宮 士郎

属性 中立・中庸

能力
筋力 E 耐久 D 魔力 D 幸運 E 敏捷
D 宝具 ????

クラススキル

対魔力：E

魔術に対する守り。無効化は出来ず、ダメージ数値を多少削減する。

単独行動：B

マスターからの魔力供給が無くなったとしても現界していられる能力。ランクBは二日程度活動可能。

固有スキル

千里眼：C

純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。

高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

魔術：C -

得意な魔術は不明だがオーソドックスな術を取得している。フエイク曰く、借り物の力らしい。

魔術（偽）：C

魔術回路を使用しない未知の術式。

B2Uを装備している間は使用可能。

心眼（真）：B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。

わずかな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる事ができる。

フェイク曰く、本来の自分はCランクの為、これもまた借り物の力らしい。

宝具

B2U

ランク：E

種別 対人宝具

最大補足 1〜10人

プロフィール

偽物と言う名のイレギュラーサーヴァント。

能力だけを見れば今回の聖杯戦争で最弱。

何故かアサシンを敵視しており、理由は「自分の生き方とは真逆故に気に食わない」らしい。

クラス アサシン

真名 殺人貴？

マスター ????

属性 混沌・中庸

能力

筋力 E

耐久 E

魔力 D

幸運 B

敏捷

B+ 宝具 A+

クラススキル

気配遮断：A+

サーヴァントとしての気配を遮断する。完全に気配を絶てば発見することは不可能になる。

ただし、自ら攻撃を仕掛けると気配遮断のランクが低下する。

固有スキル

投擲：C

短刀を弾丸として放つ能力。但し、アサシンが保有するナイフは1本しかなくあまり使う事は無いであろうスキル。

宝具

直死の魔眼（偽）

ランク：A+

種別 対人宝具

最大補足 ????

プロフィール

おそらく、今回の聖杯戦争で最も油断出来ないサーヴァント。筋力はかなり低いが直死の魔眼がある彼にはあまり関係ない。彼の直死の魔眼は本物ではなく、浄眼がただそれに近い物に為ったに過ぎないらしい。フェイクの事は本質的な物で気に入らない。

サーヴァントのステータス（後書き）

フェイク弱いです。

まあ、能力は彼のせいだけでも無くマスターが土郎だからと言つのもありますが…。

それでは！

独断（前書き）

今晚は……偽道です。

なんか……微妙。

今回は余りにも微妙。

やっぱり文才ないな……自分。

余りにも微妙なので、多分この話は更新後も修正して行くと思います。

……書いてる途中でデータが一回ぶっ飛んだから半分投げやりのに書いたんだろな……自分。

では、どうぞ！

独断

それに気付いたのは校門に入った瞬間だった。
昨日までなかったその甘ったるい臭いが鼻を突く。

(マスター、どうやら何処かの馬鹿が結界を張った様だ)

(結界?)

(ああ、この結界を張った奴は相当な外道だろうよ。
肉体を溶かし……魂を吸収しようなど……気に食わんな)

フエイクの言葉に共感する。

こんな物を張る奴の気が知れない。

これじゃあ、関係の無い誰かまで傷つける。

(フエイク……この結界……どうにか出来ないのか?)

(私には無理だ……)。

残念ながら、私はランサーの言う様に本業は弓兵でね。

私達がこの結界を解く方法は……この結界を張ったサーヴァントを
倒すしかない)

だとしても、どうやってそのサーヴァントとマスターを見付けければ
良いのだろうか?

(探すべきはキャスターのサーヴァントだろうな)

(なんでだ?)

（現代の魔術師ではこれ程の結界を張る事は出来ん。
短絡的な考えではあるが、キャスターのサーヴァントが一番怪しい
……と言う訳だ）

成る程、確かにそう言う事なら理解出来る。
なら、当分の目的は……。

（キャスターの打倒……まずはそれが俺達の目的だ）

（承知したマスター）

誰がこんな馬鹿げた事をしようとしているのかは分からない。
でも、止めてみせる……！

と、張り切ったものの……残念ながら情報がない。
フェイクが授業中に結界の起点やマスターの搜索をしてはくれたけど、マスターは遠坂以外は見つけられず……結界も彼では消す事も遅らせる事も出来ないようだ。

「くそっ……どうすれば！」

放課後の屋上に自分の怒鳴り声だけが虚しく響く。
何の為に自分は魔術を学んで来たのか？
どうしようも無い現実が今は恨めしい。

「落ち着けマスター。」

結界の基点には何らかの魔術的な妨害が施されている。おそらく、ランサーのマスターだろう……。

つまり、我々にはまだ多少の時間が残されている」

コイツがそう言うのならそうなのだろう。

確かに遠坂ならそうすると言うイメージがある。

アイツはいい奴だ。

遠坂なら、こんな物を見逃したりはきつとしない。

「それに、案外犯人は捜さずとも向こうから来るみたいだぞ？」

その言葉と共に、フェイクは俺を庇うように出口と俺の前に立つ。出口の扉がゆっくりと開かれる。

そこから現れたのは……

「やあ、衛宮。お前みたいなノロマがマスターだなんて思わなかったよ」

「慎二……?」

俺の親友である、間桐 慎二だった。

何故、慎二がマスターなんて言葉を知っているんだ？

「……この結界を張ったのはキミ達の仕業かね？」

フェイクの言葉に心臓が掴まれた様な錯覚を覚える。

そんな筈がない。

慎二がそんな事をする筈がないと言おうとした時……

「そうさ、衛宮のサーヴァントはなかなか鋭いじゃないか」

そんな信頼はいとも簡単に崩れ去った。

「とは言っても、僕も好きでこんな物を張った訳じゃないけどね」

その言葉に少しだけ光明が見えた。

慎二はこの結界を好きで張った訳じゃない。

なら、その理由は……？

「この結界はあくまで保険さ。

他のマスターに襲われた時のためにね」

「保険だつて？」

「ああ、僕は好きでこんな戦いに参加した訳じゃない。

……間桐の宿命に巻き込まれただけさ」

慎二は少し大袈裟に……それでも口惜しそうに語る。

「本当は家出しても逃げようとしたんだよ。

でもさ……僕はお前と違って妹「桜」がいるだろ？

お爺様が僕が聖杯戦争に参加しないなら桜に参加させると脅してきてさ……仕方なかったんだよ。

結界を張ったのも桜を守る為さ……」

「……慎二」

一瞬でも、慎二に裏切られたと考えた自分が恥ずかしい。
慎二は……苦しんでいたのだ。

そして、少し嬉しくもあった。

最近の慎二は桜に辛く当たっていたから……やっぱり、本音は桜を心配していた慎二にホッとする。

「分かったよ……慎二。俺はお前を信じる」

「流石衛宮。」

それでさ、物の相談なんだけどさ……僕と共闘しないか？」

夕暮れ

月明かりの下でフェイクは士郎と慎二の同盟の事を思い出しながら溜息を吐いた。

「間桐 慎二……まさか、アレが私達の目的の最大の障害になるなんてな……」

正に予想外もいい所だろう。

最初は、余りの小物っぷりに警戒などしなかった。

実力の伴わない慢心、劣等感を覆い尽くす為の姿……。

アレのサーヴァントがどれ程強力でも何時でも倒せる自信があった

から対応をマスターに任せた。

だが、今は一刻も早くあの男を倒さねばならない。

「土郎さんが……ここまでお人好しとは……な」

士郎は、自分達の目的……聖杯の破壊の事を馬鹿正直に間桐 慎二に話して仕舞った。

聖杯の破壊。

これは魔術師……特に御三家の人間からすれば許されざる事だ。もし、この情報を手土産に他のマスターと慎二が同盟を結ぼうとしたら……同盟事態は破却するもの……同盟を持ち掛けられた魔術師は危険思想を持つ自分達を優先的に狙って来るだろう。

それでは、自分達が最後まで元より小さい生き延びる可能性が殆ど0に為って仕舞う。

「……仕方がないか」

故にフェイクは独断で動く事にした。

目的は……ライダーとそのマスター、間桐 慎二の抹殺。

だが、一人ではどうしようも無い。
だから……

「さて、どうせ見ているのだろうキャスター。
今から私はライダーを討ちに行くが……協力しないかね？」

「あら、随分貧弱なサーヴァントだと思っていたけど……感は鋭い

のね……フェイク」

「それでも、一応魔術を扱えるのでね。
使い魔とただの虫の違いくらいは分かるさ」

突如現れた妖美な紫の魔女にフェイクは答える。

おそらく、これはキャスターの本体では無いのだろう。

彼女はフェイクの前に無防備で立っていた。

「さて、キミから見ても私は何時でも倒せる敵だろう？」

それが、多少厄介なライダーを潰しに行くと言っている訳だが……」

「ええ、それなら便乗させて頂くわ。

それに、貴方の様な奇妙なサーヴァントの能力も計れるかもしれないもの」

その言葉にフェイクはニヤリと笑みを浮かべた。

独断（後書き）

さて、なんか早速フェイクは士郎を裏切って独断行動を始めました。士郎は慎二を信じましたが（駄洒落のつまりはありませぬ）原作知ってる方なら解ると思いますが……慎二はかなり胡散臭い奴です。

故にフェイクは慎二の言葉を信じず、寧ろ危険人物と認定して切り捨てるつもりです。

今回はフェイク&キャスターVSライダーです。

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7609u/>

偽物の従者

2011年10月7日02時14分発行